

あとがき

バスクワーレ・ヴィナッチャが、ナポリ型マンドリンを改良して、現代のマンドリンに近い型に仕上げたのが19世紀の中頃、そして、19世紀の終わり頃には、マンドリン属の低音系楽器も揃い、イタリアでは、いわゆるマンドリン・オーケストラによる演奏活動が始まり、合奏コンクールや、20世紀初めには、作曲コンクールも開催されるようになった。

私達がマンドリン合奏で親しんでいるいわゆるマンドリン合奏曲の多くは、この頃から作曲され、第二次世界大戦に入るまでに相当数の作品が誕生している。

ファルボ(1872年生れ～1927年没)が活躍した時代は、まさにこの頃で、お馴染みの「田園写景」「二短調序曲」「組曲・スペイン」は、イル・プレットロ誌主催の作曲コンクールでいずれも第一位を獲得したもので、その楽譜は、イル・プレットロ誌を通じて日本にも到来しており、逸早く、オーケストラ・シンフォニカ・タケキなどで取り上げられ、今や日本各地で広く愛想される名曲となっている。

岡村先生は、学生時代に演奏曲目を検討中、同志社大学マンドリンクラブの楽譜庫から偶々「二短調序曲」の楽譜を見出し、その魅力に取りつかれるや否や、ファルボへの思慕の気持ちもたいへん強くなったようだ。ペットに、「ファルボ」と「サルヴァトーレ」と命名したのも、まさにその気持ちを端的に表わしたものと思われる。

そして、同志社大学を卒業した1970年、決まっていた就職内定を断り、音楽の道を志すべく、改めてピアノから始め、1974年、意を決して、まずは学生時代の演奏旅行で面識を得たアルベルト・ボッチ氏を訪ねて、マンドリン音楽の探索活動のためイタリア・フィレンツェに向けて出発したの

である。そして、同年、フィレンツェの国立音楽院声楽科に入学、1979年、主席で卒業するという快挙を成し遂げた方である。

その声楽科時代に、ファルボの音楽を探索の為、ゆかりの地・アヴォラを訪ねられ、まだ関係者の記憶の中に存在していた貴重な生の情報を中心に、一冊の本に纏められた訳である。

それにより、ファルボの生誕年や生い立ち、活躍の足跡、マンドリン音楽に傾倒した背景、マンドリン音楽持論とその思い、突然やってきた死の原因をはじめ、マンドリン・オーケストラ作品勃興期の様子やファルボを襲ったファシズム事件など、ファルボの音楽の世界と、当時のイタリアの世相やマンドリン界をつぶさに感じとることができる。

また、私的には、アレッサンドロ・ヴィッツァリ主宰のイル・プレットロ誌や、オルケストラ・シンフォニカ・タケキ主宰のマンドリン・ギター研究誌のもつ意味の大きさも、斯界の普及と発展において、たいへん重要なものであったことを改めて感じ入った。

岡村先生は、ファルボ以外にも、ボッチ氏は勿論のこと、マッツォーラ氏のご自宅やマネンテのご遺族等を訪ね、国内では未知の数々の楽譜を入手されたり、真実を解き明かし、無縁仏となっていたムニエルのお墓の整備に貢献するなど、決して誰に頼まれる訳でもなく、ビジネスにする訳でもなく、私費を投じて、唯ひたすらにマンドリン音楽にまつわる未発掘の情報を多数発掘されてこられた。その情熱と行動力には畏敬の念を抱かざるを得ない。

一例をご紹介しますと、ご存知の方も多いが、「英雄葬送曲」の楽譜は、ボッチ氏に懇願して手に入れたもので、中野先生による曲目解説にはこのことがしばしば紹介されている。また「メリアの平原にて」のメリアの地名の由来や、イタリアに幾つもあるというメリアから、この曲のタイトルと

なったメリアの地を、マネンテの長女との面会により明らかにされた。「グラウコの悲しみ」で有名なマツォーラ氏からも、複数の楽譜をいただいている。パスクワーレ・ヴィナッチャとカルロ・ムニエルの関係も、わが国では誤訳が災いして、長い間、誤った関係のまま広まっていたが、正しくは、ムニエルはヴィナッチャの孫にあたる(ヴィナッチャの娘がムニエルの母親)。この真実を解き明かしたのも、イタリア語に精通した岡村先生の功績である。さらに、当時、既に廃刊となっていた貴重なイル・プレットロ誌をほとんど集め、日本の愛好家に対してコピーサービスも行ったとのことである。

そして、楽譜をはじめ、作品のエピソードや作曲家等について得られた新しい情報は、当時、日本のマンドリン界の第一人者であった中野二郎先生に提供されたり、イル・プレットロ誌の邦訳文などは、マンドリン・ギター研究誌「FRETS」に発表され、中野先生や「FRETS」を通じて、広く日本の斯界に共有され、日本のみならず、世界のマンドリン音楽界に大きく貢献されていると言っても過言ではない。

ここに、あらためて岡村光玉先生の斯界への貢献に、心から敬意を表するものであります。

そして、最後に、イタリアで出版された「SALVATORE FALBO」は、勿論、岡村先生の訪れたファルボゆかりのアヴォラの博物館にも所蔵されていることを申し添えます。

中原 誠